

<http://www.jkcf.or.jp>

The Japan-Korea Cultural Foundation

〒105-0001 東京都港区虎ノ門5丁目12番1号 虎ノ門ワイコービル3F

TEL:03-5472-4323 FAX:03-5472-4326

第11回日韓文化交流基金賞



日韓文化交流基金では、文化および芸術分野の交流を通じて日韓両国間の友好親善に寄与した韓国人の功績をたたえるため、1999年に「日韓文化交流基金賞」を創設し、毎年1回日韓文化交流基金韓国訪問団レセプションで表彰しています。

第11回（2010年度）の受賞者は、張済国氏、曹聖奎氏、洪夏祥氏の三氏に決定し、授与式は9月16日にソウルのロッテホテルで開かれました。

受賞者プロフィール



チャン・ジェグク
張済国

1964年生まれ
東西大学校副総長

2009年まで所長を務めた東西大学校日本研究センターは、「日韓次世代学術フォーラム」や「日韓海峡圏大学サミット」、「日韓6大学共同セミナー」などを主催し、日韓の次世代を担う若手研究者間の交流や地域間交流をきわめて大きな規模で推進してきました。



チョ・ソンギョ
曹聖奎

1969年生まれ
(株)SPONGE. ENT代表

映画配給会社の代表として、2003年以来70本余の日本映画を輸入・配給し、特に日本の「ミニシアター系映画」を韓国の若者に知らしめたほか、日韓合作作品の製作にも積極的に取り組むなど、韓国における日本文化の紹介、映画関係者の交流進展に大きく貢献しています。



ホン・ハサン
洪夏祥

1955年生まれ
ノンフィクション作家

「日本の商道」をテーマに多数の著作・講演活動を行うほか、韓国企業家の日本ビジネス視察団の案内を務めています。「商道」という日本人の伝統や歴史にかかわる文化を韓国人に紹介し、日本理解の増進に貢献しています。

東西大学校のある釜山は、韓国の中で最も日本に近いという地理的要因もあり、歴史的に日本への関心が非常に高い地域である。しかしながら、日本を専門とする研究機関の多くは、同地域ではなく、ソウルに集中しているというのが実情であった。そのような状況を変えるべく、2003年9月、東西大学校日本研究センターが設立された。

本センターは設立以来、日本に関する多角的な研究活動を行う一方、日韓の学術交流、民間交流、産学協同といった多様な形態の日韓交流事業を展開してきた。特に力を入れている分野として、「次世代の育成」、「地域間交流」が挙げられるが、それらのうち3つの事業を紹介させていただく。



基金賞授与式でスピーチする張濟国東西大学校副総長

日韓の次世代を担う人材の育成① 「日韓次世代学術フォーラム」

「日韓次世代学術フォーラム」は、日韓の新たな時代を担う人文社会分野の大学院生に研究発表と相互交流の場を提供することを目的としている。2004年の設立以来、これまで7回の国際学術大会が日韓の各地域を往来しながら開催されており、日韓全土の大学院から毎年200名を超える次世代研究者たちが参加している。国際関係、経済／経営、歴史、宗教／思想など、9つの専門分野で研究発表と討論が行われ、参加者たちは国境と専門分野を越えた学術交流を体験する。

この7年間で1,000名を超える次世代研究者が本フォーラムに参加した。そのうちの1割程が卒業後に大学教員となるなど、本フォーラムに参加した多くの人材が日韓の多様な分野で活躍している。

日韓の次世代を担う人材の育成② 「日韓6大学共同セミナー」

日韓大学生の相互理解を深めるため、日韓の6つの大学の学生たちが一堂に会する共同セミナーを、毎年9月に東西大で開催している。セミナーでは両国の大学生が関心を持っている問題を共同テーマ（「教育」、「仕事」、「いのち」など）に

掲げ、それに基づいて学生たちが発表と討論を行う。また、両国の大学生が友情を育み、相互理解をさらに深められるよう、釜山滞在中にホームステイ、懇親会など、多様なプログラムも設けられている。

「日韓次世代学術フォーラム」同様、これらのプログラムに参加した学生たちが、将来、日韓をリードする人材に成長し、両国の友好親善に大きな役割を果たしてくれることが期待される。

国境を越えた地域間の共同体を目指して 「釜山-福岡フォーラム」

「釜山-福岡フォーラム」は、釜山と福岡の財界、言論界、教育界、文化界、医療福祉界のリーダー22名により、2006年に設立された。本フォーラムは両地域間の関係を交流から協力へ、協力から共同体へと発展させていくことを目的とした提言機関であり、釜山と福岡を往来しながら、毎年1回の総会を開催している。本フォーラムを通じた両地域間の連携は、これまでソウル-東京という中央の視点でのみ語られてきた日韓関係を、より重層的で多角的な関係へと発展させることに貢献し得るものである。

これまで5回の総会を通じて出された同フォーラムの提言により、「釜山-福岡友情年2009」、「釜山-福岡所在大学間コンソーシアム」、「釜山-福岡超広域経済圏構想」など、両都市間の様々な協力体制が実現し、動き始めている。

本センターの設立から7年余りが過ぎた。この間、日韓関係は大きく変化し、これまでにない程の盛んな交流が行われている。その一方で、歴史認識問題、領土問題などが浮上すると、両国関係が一気に冷え込んでしまうという、依然として変わることのできない部分も残されている。

我々がこれまで蒔き続けてきた種は着実に実を結んできており、そのような両国間の葛藤を克服する力になり得ると考える。微力ではあるが、21世紀の新たな日韓の友好協力関係の構築に今後とも寄与し続けていきたい。

PROFILE 張濟国

チャン ジェグク

米ジョージ・ワシントン大学で政治学(学士号・修士号)を専攻し、シラキュース大学ロー・スクールで法学専門博士号(JD)を取得。慶應義塾大学大学院で政治学博士号取得。米国弁護士資格を取得。伊藤忠商事(株)本社の政治経済研究所で特別研究員、米モレックス・インターナショナル(株)北東アジア本部で常任監査役、慶應義塾大学訪問研究員などを歴任。2003年から東西大学校へ。同大学では、日本研究センター所長などを歴任。現在、韓国外交通商部政策諮問委員、韓日次世代学術フォーラム代表、韓日フォーラム韓国側運営委員。

第26回日韓文化交流基金韓国訪問団

当基金の役員からなる「日韓文化交流基金韓国訪問団」が9月15日から18日までの4日間、ソウルと江原道（東海市、江陵市）を訪問し、韓日文化交流基金をはじめとする関係者や要人への表敬訪問、フェロシップ経験者との懇談や見学などを行いました。「日韓文化交流基金賞」授賞式は2日目の鮫島団長主催レセプションで行われました。

9月15日	ソウル到着 武藤正敏駐韓大使表敬訪問 李洪九（イ・ホング）韓日文化交流基金会長主催歓迎晩餐会
9月16日	ソウルジャパクラブ役員との朝食懇談会 牟喆敏（モ・ Cholmin）文化体育観光部第1次官表敬訪問 訪日・訪韓フェローとの昼食懇談会 鮫島団長主催レセプション／第11回「日韓文化交流基金賞」授与式
9月17日	双龍セメント東海工場見学 船橋荘（江陵）見学
9月18日	帰国

＜参加者＞

団 長	鮫島 章男	当基金会長、太平洋セメント（株）相談役
副団長	内田 富夫	当基金理事長
顧 問	戸塚 進也	当基金常任理事、前掛川市長、元衆議院議員
顧 問	饗庭 孝典	当基金評議員、東アジア近代史学会副会長
顧 問	小山 敬次郎	当基金監事、嘉悦大学産業文化観光総合研究所所長
団 員	楢崎 正博	当基金理事、前関電産業（株）相談役
団 員	梅田 博之	当基金評議員、前麗澤大学学長
団 員	前田 二生	当基金評議員、指揮者
団 員	大竹 洋子	当基金評議員、東京国際女性映画祭ディレクター
団 員	伊藤 亞人	当基金評議員、早稲田大学教授
団 員	小此木政夫	当基金評議員、慶應義塾大学教授
団 員	阿部 孝哉	当基金理事・事務局長



双龍セメント東海工場。340万坪の敷地で、年間1,150万トンの生産規模を有しています。双龍セメントは日本の太平洋セメントとの資本関係があります。



東海工場を背景に。訪韓団一行は、環境に配慮した生産設備や、港湾部分と結んだ8.4kmのベルトコンベアシステムなどを見学しました。



船橋荘（江陵市）は、朝鮮時代の両班の住宅。300年以上の歴史をもつ伝統家屋であり、現在では観覧と伝統文化体験ができる文化施設としても運営されています。



訪韓団一行は船橋荘内の東屋で伝統的な茶礼によるもてなしを受けました。

2010年7月下旬より8月上旬にかけて、去年に続き2回目となる「日韓姉妹都市交流ユースカップ」を開催しました。

この事業は、「21世紀東アジア青少年大交流計画」の一環であり、直行定期便の就航や姉妹都市提携関係にある5組の地方自治体(参加団体)を対象に、両国の高校生が相互訪問してサッカーを通じて地元で交流し、横浜で開催された自治体ごとの混成チームによるリーグ戦形式のサッカー大会と、相互訪問プログラムに関するプレゼンテーションの総合評価で優勝チームを決める大会です。

両国の高校生が、サッカー競技と交流という二つの顔をもつ大会の中で、共にひとつのボールを追いかけながら友情を深めました。



<参加団体、相互訪問プログラム>

各地方でのプログラムは、7月の韓国派遣からスタートし、8月には日本への招聘を行いました(日本への招聘は横浜での合同プログラムを含みます)。合同練習や親善試合でチーム内の意思疎通をはかり、また学校訪問、合宿・ホームステイ、文化体験などを通じて、相互理解や地域に対する知識を深めました。

●仙台市 (東北学院高等学校・錦湖高等学校(光州広域市))

派遣:7/26~7/30

招聘:8/5~8/12

光州市役所表敬訪問、無等W杯競技場ほか見学、錦湖高訪問・ホームステイ・交流試合

東北学院高訪問・合同練習、仙台七夕祭りほか見学、ホームステイ、練習試合、Jリーグ試合観戦



錦湖高の生徒と対面する東北学院高の生徒(派遣)

●横浜市 (横浜隼人高等学校・仁川南高等学校龍チーム、横浜商科大学高等学校・仁川南高等学校虎チーム(仁川広域市)) 2チーム

派遣:(隼人高)7/26~7/30

招聘:8/6~8/12

(横浜商科大高)7/26~7/29

分鶴W杯競技場見学、仁川南高訪問・寮宿泊、交流試合、文化体験、ソウル市内見学、上岩洞W杯競技場見学

横浜市内見学、合同練習、J2試合観戦、学校訪問・交流会・ホームステイ、横浜市役所表敬訪問



仁川南高の生徒から、横浜商科大高の生徒へのプレゼント(派遣)



仁川南高と隼人高の混合チーム(派遣)

●山梨県 (県立桂高等学校・忠州商業高等学校(忠清北道))

派遣:7/22~7/29

招聘:8/5~8/12

清州市内見学、忠清北道庁表敬訪問、忠州商業高訪問・合同練習・ホームステイ・親善試合、ソウル市内見学

山梨県内見学、山梨県庁表敬訪問、桂高訪問・合同練習・歓迎会、富士山見学、親善試合、ホームステイ



桂高での弓道体験(招聘)

●鹿児島県 (鹿児島県内高校生・全羅北道内高校生)

派遣:7/23~7/28

招聘:8/5~8/12

合宿、テコンドー体験、全州W杯競技場見学、練習試合、ホームステイ、全羅北道庁表敬訪問、ソウル市内見学

鹿児島県庁表敬訪問、鹿児島市内見学、ホームステイ、交流試合



交流試合後、記念品を交換(招聘)

<プレゼンテーション・コンテスト> 8月9日(月) 新横浜プリンスホテル

各地で交流やサッカーの練習試合などを終えた参加地方団体5チーム約130名が横浜に集合し、開会式とプレゼンテーション・コンテストが開催されました。開会式では対戦相手の組み合わせ抽選会の後、サプライズイベントとして横浜F・マリノスの木村和司監督によるトークショーが開かれました。参加生徒たちはスペシャルゲストの突然の登場に驚きつつも、元日本代表の大先輩の話に聞き入っていました。

各チームのプレゼンテーションは、多彩な交流内容の報告に加え、お互いの国を訪ねてサッカーはもちろん、食文化や伝統文化までさまざまな体験から感じたこと、チーム内外の人々との交流で理解を深められたことなどが紹介されました。

発表後には、ゲスト審査員の法政大学の山本浩教授(元NHKエグゼクティブアナウンサー)、在日本大韓蹴球協会の金英明会長から「相手と自分自身をよく知ってこそ、理想のサッカーに近づく」というアドバイスをいただきました。



横浜F・マリノス木村監督(右)から熱いメッセージをいただいた



韓国で習ったテコンドーの型を披露する生徒たち

<サッカー大会> 8月10日(火)、11日(水) 横浜みなとみらいスポーツパーク

2日間にわたって行われたサッカーのリーグ戦では、ビル群に囲まれた会場で潮風を浴びながら、どのチームも最後まで譲らない接戦となりました。試合の合間には、キックスピードやキックボーリング、的当てを競うサイドイベントが行われ、その結果がチームに加算されるだけに、高得点が出るたびに歓声が挙がっていました。



互いに譲らない接戦

	仙台市	横浜市 (華人・仁川南龍)	横浜市 (商大・仁川南虎)	山梨県	鹿児島県	勝	負	分
仙台市		△	●	△	●	0	2	2
横浜市 (華人・仁川南龍)	△		○	●	○	2	1	1
横浜市 (商大・仁川南虎)	○	●		●	△	1	2	1
山梨県	△	○	○		△	2	0	2
鹿児島県	○	●	△	△		1	1	2

○=勝ち ●=負け △=引き分け

<表彰式> 8月11日(水) 新横浜プリンスホテル

プレゼンテーション・コンテストとサッカー大会の結果、総合優勝は山梨県立桂高等学校・忠州商業高等学校チームに決定し、主催者を代表して当基金の鮫島章男会長から優勝トロフィーが贈呈されました。また、参加全チームに岡田克也外務大臣(当時)からの賞状が授与されました。会場のあちこちで交流の思い出話をしたり、お別れの前の思い出に記念撮影する姿が見られました。参加選手からは「言葉だけの会話に頼らなかった分、相手の心を感じられるようになった」「国・チームを超えた出会いからプレーの勉強になった」「今後も行き来をして交流を続けたい」といった感想が出ていました。



総合優勝に輝いた山梨県チーム

当基金では今年度“日韓文化交流の〈きのう・今日・明日〉”というテーマのもとで、シリーズ講演会を開催しています。第1回目は、『ハングルの誕生』（平凡社新書、2010年）の著者である野間秀樹先生に、ご自身の著書についてお話しいただきました（2010年9月24日（金）、日韓文化交流基金会議室）。なお、同書により、野間先生は第22回アジア・太平洋賞大賞を受賞されました。



私が『ハングルの誕生』で申し上げたかったことは、ハングルは面白い、凄いの、そして深い、ということです。ハングルを見ると、漢字やかなやローマ字も見えます。文字だけではなく、人間にとって文字とは何か、言語とは何か、知とは何か、といった、非常に大きな問いを問うことになる。〈ハングル〉の思考を〈知〉の広野に解き放ちたい、というのが、『ハングルの誕生』にこめた私の願いです。

〈訓民正音〉の登場

〈ハングル〉は、15世紀の朝鮮半島で、世宗大王と集賢殿に集った若き秀才たちが目的意識的・人工的に作った文字体系であり、『訓民正音』という驚嘆すべき書物で歴史の中に現われます。



『訓民正音』
解例本

朝鮮王朝時代に、朝鮮語は、〈話されたことば〉としてのみ存在し、〈書かれたことば〉としては存在していませんでした。書かれた歴史の時代を貫いて、朝鮮半島にあっては、〈文字〉とはすべて漢字であり、〈文〉〈文章〉というのは漢文のことでした。これが、〈正音〉＝ハングルの出発点です。

漢字にあっては、「形」がある「音」と結びつき、それが指し示す「義」と結びついているという関係が、〈形音義〉のトライアングルとして成り立っています。〈正音〉を作るとき、世宗らはこうした漢字のスタイルはとらず、まったく新しいやり方をとることにしました。それは、〈音〉＝言語音をつぶさに見て、そこから文字を作り出すということでした。

20世紀言語学では、発せられた言語音から単位をいかに切り出すかという問いに対し、〈音素〉という概念の発見で答えました。〈音素〉とは、単語の意味を区別する最小の音の単位のことです。たとえば、日本語の「出る」と「照る」という単語で、

意味を区別しているのは/d/と/t/の子音の違いだけです。このとき、日本語では/d/と/t/を音素として取り出すことができます。そして驚嘆すべきことに、15世紀朝鮮の〈訓民正音〉は、20世紀言語学を迎えてたどりついた〈音素〉へと、ほとんど到達していました。〈正音〉で字母として一つ一つ形を与えた音の単位が、今日私たちが〈音素〉と呼ぶ単位だったのです。

子音字母に与えられたかたちは、その子音が発音されるときの音声器官の〈かたち〉を〈象形〉したものです。『訓民正音』解例本には、「〈正音〉二十八字、各其の形を象る」とあり、具体的に口の中の形が、微に入り細をうがって書いてあります。また、加画の原理によって、同じ唇の形や舌の位置から派生した音には、基本となる形に画を加えてシステムティックに表しています。〈正音〉には音のかたちが棲んでいる、といえます。



/k/を象る

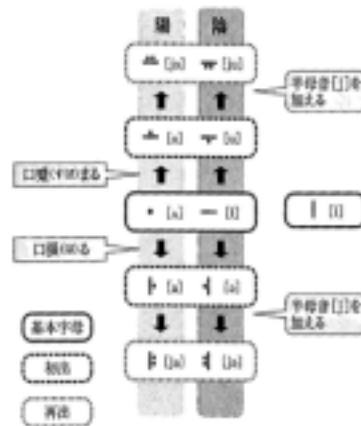


/n/を象る

音	訓	音	訓	音	訓
○ [a]	ㅏ [a]	ㄱ [k]	ㅑ [ka]	ㅓ [sa]	ㅕ [sa]
ㄷ [d]	ㅓ [da]	ㅋ [kʰ]	ㅕ [ka]	ㅗ [o]	ㅛ [wo]
ㄹ [l]	ㄴ [n]	ㆁ [ŋ]	ㅇ [ŋ]	ㅜ [u]	ㅠ [u]
ㅌ [t]	ㅕ [ta]	ㅗ [o]	ㅛ [wo]	ㅜ [u]	ㅠ [u]
ㅍ [p]	ㅑ [pa]	ㅜ [u]	ㅠ [u]	ㅡ [ɨ]	ㅟ [ɨ]
ㅊ [tʃ]	ㅑ [tʃa]	ㅟ [ɨ]	ㅟ [ɨ]	ㅣ [i]	ㅝ [i]
ㅍ [p]	ㅑ [pa]	ㅟ [ɨ]	ㅟ [ɨ]	ㅣ [i]	ㅝ [i]
ㅑ [ka]	ㅑ [ka]	ㅟ [ɨ]	ㅟ [ɨ]	ㅣ [i]	ㅝ [i]
ㅓ [sa]	ㅓ [sa]	ㅟ [ɨ]	ㅟ [ɨ]	ㅣ [i]	ㅝ [i]
ㅕ [sa]	ㅕ [sa]	ㅟ [ɨ]	ㅟ [ɨ]	ㅣ [i]	ㅝ [i]
ㅗ [o]	ㅗ [o]	ㅟ [ɨ]	ㅟ [ɨ]	ㅣ [i]	ㅝ [i]
ㅛ [wo]	ㅛ [wo]	ㅟ [ɨ]	ㅟ [ɨ]	ㅣ [i]	ㅝ [i]
ㅜ [u]	ㅜ [u]	ㅟ [ɨ]	ㅟ [ɨ]	ㅣ [i]	ㅝ [i]
ㅠ [u]	ㅠ [u]	ㅟ [ɨ]	ㅟ [ɨ]	ㅣ [i]	ㅝ [i]
ㅡ [ɨ]	ㅡ [ɨ]	ㅟ [ɨ]	ㅟ [ɨ]	ㅣ [i]	ㅝ [i]
ㅟ [ɨ]	ㅟ [ɨ]	ㅟ [ɨ]	ㅟ [ɨ]	ㅣ [i]	ㅝ [i]
ㅣ [i]	ㅣ [i]	ㅟ [ɨ]	ㅟ [ɨ]	ㅣ [i]	ㅝ [i]
ㅝ [i]	ㅝ [i]	ㅟ [ɨ]	ㅟ [ɨ]	ㅣ [i]	ㅝ [i]

子音字母の〈かたち〉の派生の体系

一方、母音字母は、「天地人」を象って作り、陽母音は上または右に点、陰母音は下または左に点を置き、陰陽の対立がわかるようになっています。15世紀朝鮮語にあっては、「나」na(私)のように陽母音で終わる単語には、「は」にあたる助詞「은」nAnも陽母音から



母音字母生成の仕組み

なるものを用います。「ㄴ」na(おまえ)が陰母音だと、「は」にあたる助詞「는」ninにも陰母音が来ます。これを「母音調和」と言いますが、文字の上でもその仕組みがわかるようになっていきます。

〈正音〉エクリチュール革命

『朝鮮王朝実録』には、崔萬理という人物らが正音に反対した上疏文があります。「中国の制度・文物に則って生きてきた朝鮮の生きる道に〈正音〉のあり方は反している」というその内容を以って、近代の学者たちは崔萬理を事大主義者と批判していますが、それは上疏文の政治的な側面しか見ないやや早計な批判だと思います。

崔萬理ら王朝を支える知識人たちは、漢字漢文により名を与えられ、友と文や詩を交換し、科擧も、王が死を賜う命令書も、死してのち許されるのもすべて漢字漢文でした。そして、崔萬理らの思想は、〈正音〉について、優れて言語学的・文字論的に、広く知の地平から問いを立てていることも、見逃してはならないと思います。正音の潜在力が漢字漢文エクリチュール(仏語:écriture、文字・書かれたもの、書法、書く行為、の意)の根幹を揺るがすような内容を持つものであったがゆえに、漢字漢文を原理主義的に理論化しようとしたのが崔萬理たちの思想であるといえます。

侵すべからざるものとしてあった漢字漢文により、ありとあらゆる〈知〉が形象化されてきたゆえに、いかに王といえども、知の根幹に抵触することは許されない。よって、「用音合字」という、音の一つ一つに形を与えて一文字を形成するような〈正音〉のシステムそれ自体に対し、必死に異議を申し立てているのです。生きた細胞・有機体たる一文字一文字が意味をなす。そうした漢字が知をつくるのに対し、正音は細胞であるべき文字を、音節たる分子に、分子は音素たる原子に解体し、無機的なエレメントに解体してしまっている。言語学的に言えば、形態素は音素に解体すると意味を実現しなくなるということです。そんなことをすると、知が、エクリチュールが崩壊するのではないかと。

それに対して、〈正音〉創製の中心メンバーである鄭麟趾は、『訓民正音』解例本の跋に言います。「天地自然の声有れば、則ち必ず天地自然の文有り」。そして、次のことばこそ、渾身のエクリチュール革命宣言といえるでしょう。「風声鶴唳、鷄鳴狗吠と雖も、皆得て書くべからん」一風のそよ音も、遠き鶴の鳴き声も、夜明けを告げる鷄の鳴き声も、そして犬の遠吠えさえも、ことごとく正音の表せないものはない。どうだ、かつて漢字で朝鮮語のオノマトペ(擬態擬声語)まで表せたか?

つまり、朝鮮語のオノマトペを表すためには、漢字を借りるのではなく、どうしても〈用音合字〉というシステムでなけれ

ばなりません。漢字は鶴の形を象形することは得意ですが、その声を表すことはできません。朝鮮語の表現の中に豊かに含まれ、朝鮮の地の声・ことばを表すオノマトペこそ、〈用音合字〉の優位を圧倒的な形で示すことができるものだったわけです。

普遍への契機としての〈訓民正音〉

この本の結びにこのように書きました。「〈訓民正音〉とは、ことばとは何か、文字とは何か、人間にとって文字とは、エクリチュールとは、知とは何かといった普遍へと導いてくれる、稀有なる奇跡である」。従って、〈訓民正音〉というのは韓国語という一つの言語圏だけの財産にとどまらない、誰もがそれを共にしうるものではないかと思うのです。

言語がコミュニケーションの道具だから社会的なのだというよりも、人がことばを有することそれ自体が圧倒的に社会的なのです。ことばというのはその原理的なあり方自体が〈学び=教えつつ〉存在するものであり、これは話されたことばも書かれたことばも同じです。

1446年にできた『訓民正音』解例本は、木版の袋綴じになっていて、その一部の裏に『十九史略諺解』が墨書されていました。ある時は、裏返して製本しなおして、『十九史略諺解』の裏のテキストとして、『訓民正音』解例本は500年を生き抜いてきました。それが慶尚道安東の旧家で1940年に発見されたときは、製本しなおされて表になり、女性たちのハングル教育に用いられていました。みんなで輪になってこの本を見ながら、これが「a」だ、などとやりながら、ことばを、文字を学ぶ喜びといったものを、一人一人が感じていたことでしょう。『訓民正音』解例本というのは、文字通り〈学び=教える〉という日常の中に存在しており、これこそまさに〈正音〉エクリチュール革命を担った人々の志であり、世宗の夢だったといえるのではないかと思います。『訓民正音』解例本は、奇跡的に残って、私たちの前にあります。それは肌触りを有し、質量を有し、香りを有するようなテキストとして存在していました。〈訓民正音〉とは、ユーラシア東方の極に現れた、エクリチュールの奇跡なのです。

PROFILE 野間 秀樹

の ま ひでき

1953年生まれ。専門は朝鮮言語学、日韓対照言語学、韓国語教育。著書に『ハングルの誕生』(平凡社新書)、『韓国語 語彙と文法の相関構造』(ソウル、太学社)、『新・至福の朝鮮語』(朝日出版社)、『絶妙のハングル』(日本放送出版協会)などのほか、編著書に『韓国語教育論講座』(全4巻、刊行中、くろしお出版)。2005年大韓民国文化褒章受章。また、美術家としての活動もある。1996~97年ソウル大学校韓国文化研究所特別研究員。前東京外国語大学大学院教授。

はじめに

朝鮮半島や日本列島を含む東アジア文化圏は、漢字、律令制、儒教、漢訳仏教の四つの共通する文化要素を持っています。これらの文化要素は、中国の皇帝と周辺各国の国王との間の政治的関係(冊封関係)に規制されて伝播し、さらに各国の国王を中心とする仏教興隆体制が築かれてきました。朝鮮半島を475年間にわたって支配した高麗王朝においても同様であり、高麗国王と仏教教団とを結合する様々な制度や慣習が整備されました。

ところが、高麗時代の基本史料である『高麗史』では、中国の正史(公式なものとされる紀伝体の歴史書)の伝統を継承して、仏教関連の記事は粗略に扱われており、制度や慣習の研究に大きな制約をもたらしています。こうした中で、仏事関連の記事は『高麗史』世家(歴代国王の事跡を記した部分)を中心に多数の記録が掲載されており、約1,200回に及び仏事の開設記録が見られます(金炯佑1992)。

これらの開設記録のほとんどは時期、場所について記すのみであり、さらにそれすらも省略されることが多いため、八関会や燃灯会のような『高麗史』礼志に項目を持つ仏教的な行事を除く、個別仏事の研究は不振な状況にあります。また先行研究では世家における開設記録の登場頻度を基準として各仏事の重要度を判断する傾向もあり、記事を省略されがちな恒例仏事は軽視されてきました。こうした研究状況の中で、『高麗史』のほか文集や金石文史料を踏まえて、個別仏事の開催目的、時期、場所、主体、参加者、実務担当者などを整理し、可能な範囲で仏事の次第を復元し、その上に立って高麗の恒例仏事体系の全体像を描き出すことがわたしの当面の研究課題です。

この小文では、高麗時代の恒例仏事のうち、蔵経道場と転蔵仏事を中心に紹介しようと思います。

蔵経道場の成立

蔵経道場とは、大蔵経の転読(略読)を中心とする仏事です。高麗時代には、靖宗7年(1041)以降、春例(6日間)・秋例(7日間)の年二度の恒例仏事として開設されました(『高麗史』巻6・靖宗世家・7年4月癸巳条)。『高麗史』世家では、年一、二度開設される恒例の行事は初出のみ掲載することとなっていたので、世家に掲載された蔵経道場は国王の出御を伴う等の特別な事例を除いて、その編纂過程で削除されたと考えられます。

蔵経道場は、世家に掲載された事例こそ23例と決して多くはないものの、高麗の前期から末期まで継続して開催され、かつ年一度、あるいは数年に一度開設されたほかの恒例仏事

とは異なり年二度開設されたことから、高麗において最も頻繁に開設された仏事であったと推定できます。

この蔵経道場において転読された大蔵経(蔵経)とは、釈迦の説いた教えをまとめた経蔵、教団の規則をまとめた律蔵、教理の研究をまとめた論蔵の三つ(三蔵)からなる、仏教經典の総体のことです。高麗時代の大蔵経と言え、11世紀に刻板された初雕本と、モンゴルの攻撃によって初雕本が焼失して再び13世紀前半に刻板され現在も韓国の海印寺に板木が残る再雕本(図1参照)との、二つの高麗版大蔵経が有名です。蔵経道場もかつては高麗版大蔵経を利用した仏事であると理解されてきました(安啓賢1975等)。



図1 海印寺大蔵経板殿(慶尚南道陝川郡)※建物内部に板木が保管されている。

ところが、中国からの大蔵経の輸入は10世紀前半の太祖王建の時代から事例が見られ、かつ仏寺で大蔵経を転読する仏事も10世紀前半の事例が見られます(『惠居国師碑』等)。そもそも大蔵経を転読する仏事は、大蔵経が1部(1セット)あれば可能なはずですから、板木に基づいて大量に印刷した木版大蔵経とは直接の因果関係にはありません。ゆえに、蔵経道場と高麗版大蔵経とは、大蔵経に対する信仰を背景にするという意味では共通するものの、直接結びつけて考えることはできません。

靖宗年間に恒例化した蔵経道場には、大きな特徴があります。それは、開設場所が王府第一の正殿である会慶殿であったことです。会慶殿は、上国(宋)の使者がもたらした皇帝の国書(詔書)を拝受する行事等の特別な行事に使用する王府の心臓部であったと言えますが、蔵経道場がこうした場で恒例的に開設されたことはその格式の高さとともに、高麗王朝の支配体制の維持において大きな役割を果たしたこともうかがえます。

『東文選』巻110所掲の「転大蔵経道場疏」には「ただ国家が長くつづき、人民が栄えて豊かとなるために、謹んで前例

にならって、宮城内の会慶殿で、今月の某日から始めて、数日間の日夜と期日を定め、よく整えた道場を開設して供養しようと思う。根本の師である釈迦を筆頭に、聖賢を一堂に集め、さらに高名な法師を迎えて、大蔵経を転読して、優れた功德を修めることとする」とあり、転大蔵経道場（蔵経道場）の開設期間には、釈迦仏を初めとする聖賢（菩薩等）の像が設けられ、高名な法師を迎えて転読を行い、国家や人民の繁栄を祈ったとあります。

このほか、官僚が実務を担当し、開設を祝して詩文を奉呈することも慣例となっていました。李奎報の文集である『東国李相国集』には14首に及び大蔵経道場（蔵経道場）の音讃詩が採録されていますが、このことは李奎報らの官僚が宮城での蔵経道場にたびたび参列して詩文を呈したことをうかがわせます。

転蔵仏事の展開

太祖代に起源を持ち靖宗代に恒例化した蔵経道場は、会慶殿を中心に開設され、高麗末期に至るまで開設されていたと考えられます。

一方、高麗では二度の大蔵経の開版を経て相当な部数の大蔵経が印刷され、中国からも宋版、遼版、元版の大蔵経が流入を続けていましたから、高麗国内には少なくとも百部に近い数の大蔵経が存在したと思われます。中央、地方の仏寺には大蔵堂、大蔵殿等の名前を持つ殿閣が建立され、そこに大蔵経が奉安されました。

大蔵経が奉安されるとともに、大蔵経を転読する転蔵仏事が開設されます。転蔵仏事の開設は大蔵経奉安を記念して開設される事例もありますが（開国寺、地藏寺等）、施主の個人的な意向による恒例仏事として開設される事例も散見されます。例えば、神勒寺には、高麗末期の禡王8年（1382）に新たにもたらされた大蔵経を奉安する場所として二層の殿閣（大蔵閣）が建立され、5月以降、毎年正月、5月、9月の三度、大蔵経を転読することが規定されました。現在神勒寺に残る『大蔵閣記碑』（図2参照）の裏側（陰記）には、碑文建立に寄与した僧俗施主の羅列につづいて、壬戌の年（1382）から辛酉の年（1441）までの約60年間毎年三回の転蔵仏事が途絶えることなく続けられていたことが記されています。

宮城での蔵経道場と地方仏寺（ここでは神勒寺）での転蔵仏事とは、開設時期も回数も一致しておらず、両者が連動して同一の目的で開設されたわけではありません。その一方で、大蔵経を転読し、年数回開設される恒例仏事という共通点を持っており、大蔵経信仰に基づく共通の背景のもとに、こうした仏事が高麗国内各地で開設されたことをうかがい知ることができます。



図2 神勒寺大蔵閣記碑閣（京畿道驪州郡）※碑閣内部に碑文が保存されている。

おわりに

高麗時代の大蔵経研究では、大蔵経がどのように刻板されたのか、あるいは中国からどのように輸入されたのかについての研究の蓄積がなされてきました。ところが、大蔵経をどのように利用したのかという点については、これまであまり注目されてきませんでした。

今後も高麗時代の恒例仏事を含めた制度や慣習の研究を進めることで、高麗国王と仏教教団・社会との接点を探っていきたいと思います。

〈引用文献〉

- [安啓賢1975]「仏教行事の盛行」（『韓国史』6、大韓民国文部部・国史編纂委員会）
- [金炯佑1992]「高麗前期国家的仏教行事の展開様相」（『伽山李智冠師華甲紀念論叢 韓国仏教思想史』巻上）

PROFILE 安田 純也

やすだ じゅんや

2005年滋賀県立大学人間文化科学研究科博士課程修了（博士〔人間文化学〕）。現在は滋賀県立大学・龍谷大学・神戸大学非常勤講師。専門は高麗史、東アジア仏教史。著書に『東アジアの儀礼と宗教』（共著、雄松堂出版、2008年）ほか。



1 青少年交流事業

訪日団

団体名	団 長	計 ※1	男 ※2	女 ※2	期 間	主な訪問先
韓国高校生 (第1団)	金泰煥(キム・テファン) 清州南中学校校長	54	17	33	9/9～15	山梨県立身延高等学校
韓国高校生 (第2団)	姜成模(カン・ソンモ) 阿岷中学校校長	54	20	30	9/9～15	山梨県立白根高等学校

※1 引率含む ※2 生徒のみ



歓迎行事(白根高等学校)



和室で茶道体験(身延高等学校)

訪韓団

団体名	団 長	計	男	女	期 間	主な訪問先
日本教員 (第1団)	田中諭 文部科学省初等中等教育局 財務課専門官/庶務・助成係長	20	13	7	6/22～7/1	ソウル教育大学校、同付設初等学校 ソウル高等学校 大清中学校



ソウル教育大学校でのブリーフィング



ソウル教育大学校付設初等学校の授業風景

団体名	団 長	計 ※1	男 ※2	女 ※2	期 間	主な訪問先
三重県中学生	上島均 津市立一志中学校校長	56	26	24	9/12～18	冠岳中学校(ソウル)

※1 引率含む ※2 生徒のみ



韓国民俗村の見学



コリアハウスでサムルノリ体験

2 「日韓交流おまつり」関連招聘事業

10月にソウルで開催された「日韓交流おまつり」に参加する日本の東北地方のお祭りの取材のため、韓国マスコミ関係者を招聘し、8月2日～5日の3泊4日間、3名の記者が盛岡さんさ踊り、青森ねぶた祭、秋田竿燈まつりの取材を行いました。

趙誠夏(チョ・ソンハ) 東亜日報副局長
 朴仁恵(パク・イネ) 毎日経済新聞記者
 鄭煥普(チョン・ファンポ) 京郷新聞記者



青森ねぶた祭の「はねっこ」に扮した記者たち

3 第3回日中韓サミット 3か国の児童のタイムカプセル埋設

2010年に10歳になる3か国の小学4年生の児童を対象に、未来の自分と東アジアの友だちに向けた手紙を募集し、それらをタイムカプセルに納めて、第3回日中韓サミット(5月30日、済州)において埋設するという行事が行われました。当基金では、外務省からの要請により、日本の児童の手紙の募集と取りまとめを行いました。全国から寄せられた1,245通の手紙はすべてタイムカプセルに納められ、サミット期間中に日中韓の首脳が日中韓3か国の児童合計50名(うち日

本の児童はソウル日本人学校の10名)といっしょに済州国際コンベンションセンターに隣接する公園の一角に埋設しました。サミット終了後、応募してくれた日本の児童の皆さんには、当基金からお礼の手紙と記念品を贈りました。今回埋めたタイムカプセルは10年後の2020年に掘り起こされ、今回手紙を送ってくれた児童の中から各国30人ずつ代表を選び、日中韓3か国の青年による交流事業を行う予定です。

4 2010 日韓ガールスカウト交流事業

(社)ガールスカウト日本連盟へ委託している「日韓ガールスカウト交流事業」が行われました。今年度は韓国ガールスカウト90名(スカウト78名、指導者12名)が4コースに分かれ、石川県(7月28日～8月4日)、大阪府(8月3日～8月10日)、福岡県(7月25日～8月1日)、日本のガールスカウト運動90周年記念国際キャンプ(8月3日～8月10日)を訪れ、ホームステイやキャンプ、文化体験などを通して交流を深めました。



コツを教わりながら手打そば作りを体験(石川県支部)

5 理工系大学院生研究支援事業(派遣)

当基金より(財)日韓産業技術協力財団への委託事業である「理工系大学院生研究支援事業」の派遣プログラム「Summer Institute」が、8月2日から9月17日まで韓国で行われました。この事業は研究交流を目的に、日韓双方が理工系大学院生を派遣し、大学・公的研究機関で研究研修を行うもので、今年で3回目となります。派遣プログラムには5名の日本の大学院生が参加し、韓国語と文化研修に続いて、受け入れ先の研究所で研究研修を行いました。



開講式

事業報告

6 「日韓高校生交流キャンプ(派遣)」「日韓学生未来会議」

当基金より(社)日韓経済協会への委託事業である「第15回日韓高校生交流キャンプ」が8月3日から4泊5日間、ソウルで開催されました。日韓双方から参加した99名の高校生が、10人前後の日韓混成チームを編成し、事業企画の立案・発表や交流プログラムを通じて交流を深めました。

また、同じく(社)日韓経済協会への委託事業であり、日韓高



日韓高校生交流キャンプ・ソウルの繁華街で市場調査

校生交流キャンプOBの大学生・高校生が参加する「第5回日韓学生未来会議」も、8月9日から4泊5日の日程で京都で開催され、両国合わせて37名の若者たちが、「都市環境」をテーマとした議論・実地調査とそれに基づく政策発表、文化体験などを行いました。



日韓学生未来会議・日韓の学生が協力して「理想都市・京都」を考えました

7 維持会員

2010年7月1日～9月30日の期間に、個人会員29名の方に維持会員制度にご加入いただき、30万円の会費収入となりました。皆さまのご厚意に深く感謝申し上げます(五十音順、敬称略。カッコ内の数字は2口以上の口数)。

●個人

秋鹿敏雄	李炯喆	大竹洋子	大谷森繁	梶谷崇	金容媛	木村健二
熊野清貴	倉田秀也	小針進	柴公也	芹川哲世	鄭仁豪	月脚達彦
辻星児	中山隆夫	中山めぐみ	並木正芳	信原修	濱田耕策	平田辰一郎
平山龍水	広瀬貞三	藤原祥二	松本誠一	真鍋祐子	村井章介	山根真理
和田とも美(2)						

8 2011年度 公募プログラム案内

人物交流助成

2011年度(2011年4月～2012年3月)実施事業に対する人物交流助成の申請を、2011年1月4日から1月28日まで受け付けます。

学術定期刊行物助成

2011年度(対象期間:2011年4月～2012年2月)の学術定期刊行物助成の申請を、2011年1月17日から1月28日まで受け付けます。

人物交流助成、学術定期刊行物助成とも、年1回の募集となります。詳しくは募集要項をご覧ください。

人物交流助成および学術定期刊行物助成の募集要項・申請書は当基金ウェブサイト
<http://www.jkcf.or.jp>からダウンロードできますので、どうぞご利用ください。